

# 深イ～話！

No.52

——京都府視覚障害者協会副会長 松永信也 「男女共同参画フォーラム」より——

僕は失明という現実を前にして、約1年間、家でくよくよし続けました。でも最後には「もうええ、あきらめなしやあない」と思いました。

この話を、京都大学のがん患者の会に呼ばれて講演した時に話しました。みんな重度のがん患者でした。講演が終わった後、話しかけてきた人がいました。

「あんな、私らもそうやった。がんと言われたときな、『ウソ？』『まさか！』『なんで？』って思った。中にはご飯が食べられなくなった人もおるし、声が出えへんくなった人もおるし、家の中の物をつぶす人もおるし、みんないろいろや。でもな、最後は必ず『しゃあない』って思うねん。しゃあないって思ったらな、生きていくねん。私もな、お医者さんに、余命半年くらいと言われたんや。それがもう4ヶ月過ぎてん。でも、私は死んでいくのと違ってな、生ききっていくねん。」人間って、受け止められるんですね。

僕は、「あきらめなしやあない」と思った時、もう1回外を歩きたいと思いました。それで視覚障害者のための生活訓練施設に行くことにしました。

そこで最初に友だちになったおばちゃんがあります。僕が訓練でひいひい言っているのに、そのおばちゃんは杖を使ってすいすい歩かし、点字もすごいスピードで読んでいました。

「すごいですね」と言ったら、おばちゃんは、「そりゃあ、あんた、私、生まれつき目え見えへんから。お母ちゃんのお腹にいたとき、病気になってん。」と言いました。

「このおばちゃん、僕よりかわいそうな人なんや。」と思いました。

実は、僕はずっと障害を持った人を、どこかで「不幸なのかもしれない」と思っていたのです。

おばちゃんはとても優しい人で、僕はすぐに大好きになりました。それは、ひとつには缶コーヒーをおごってくれたから(笑)。当時の僕は自分で缶コーヒーを買うのもすごく大変だったんです。僕とおばちゃんはとても仲良しになりました。ただ、おばちゃんの前では景色や色の話をしないようにしていました。僕は40歳まで目が見えていたけど、おばちゃんは何も見たことがない。「景色とか色の話したらあかん。失礼や。」そう思って、一切言いませんでした。

でもある時、おばちゃんがふいに、「松永さんは、何色が好きなん？」と僕に聞いたんです。とっさに言葉が出てきませんでした。そしたら、おばちゃんが「私はな、ピンクが好きなんや。」と言ったのです。

「見たことないやろう？ なんでピンクが好きって言えるん？」

「小学生のときな、お母ちゃんがピンクの服を買ってくれはってん。それ着たら、みんなが『よう似合う、かわいい』って言うてくれはってん。私、女の子やん、めっちゃ嬉しかってん。だから私、ピンクが大好きになったんや。今でも服を買いに行くやんか。お店の人につい『ピンク系統にして』って言うから、私ピンクが多いねん。」 「じゃあ、ピンクってどんな色やと思うてんの？」

おばちゃんは、「桜の花の色やろ？」と言って、ふふっと笑いました。「私な、春になったら毎年友だちと花見に行くねん。行って桜の花を触らせてもらうねん。そしたらいつも幸せな気持ちになんねん。『これがピンクやな』って思ったら、めっちゃ幸せな気持ちになんねん。」

僕は約40年間、見えない人を、見えないというだけで「かわいそう」「幸せから遠いところにいる」と決めていました。そんな自分がとても恥ずかしくなりました。

